

# 広島別院だより

## 被爆八十周年特別号

### 被爆八十周年

### 非核非戦法会が勤まる

七月六日に「被爆八十周年非核非戦法会」が厳修されました。加藤真樹前輪番(現山陽四国教務所長)に代わり、新しく専任輪番に就任した泉原寛康師が導師を勤め、雅楽の演奏を交えた法要が厳かに勤められました。当日は教区改編により新たに山陽四国教区が発足したこともあり、地元だけでなく四国など遠近各地より多数の参詣があり盛大な法要となりました。



Vol.49  
夏号

真宗大谷派(東本願寺)  
広島別院教化委員会 発行



泉原寛康専任輪番

子供たちの手による打敷

また別院の内陣を飾る打敷は三月三十・三十一日に開催された「山陽教区児童春のつどい」に参加した子供たちが力を合わせて製作したものであり、内陣に一層の彩りを加えました。法要後は被爆体験証言者の切明千枝子さんと一橋大学大学院生の佐藤優さんによる講演会があり、お二人の話に参詣者は真剣に耳を傾けていました。以下、講演のレポートです。

### 《第一部 切明千枝子さん講演レポート》

切明さんはもうすぐ九十六歳を迎える。今も尚、歌人として、被爆体験証言者として毎日精力的に活動されているが、かつては原爆の記憶を忘れてしまいたいと思っていたそうである。しかし忘れようと思えば思うほど、思い出してしまう。この記憶は忘れてはならないのだと気づいたのが八十才を超えた頃だったそうである。その記憶と平和への思いを一時間にわたり語られた。

### ●原爆投下直後の惨状

太平洋戦争当時、女学生だった切明さんは学徒

動員で勤務した皆実町の煙草工場で被爆した。工場内にいた切明さんは怪我を負うが何とか死を免れた。しかし多くの親族や友人が亡くなってしまった。特に多く亡くなったのが、建物疎開の作業中、屋外で作業していた下級生たちだった。

下級生たちは全身に大火傷をし、皮膚が剥がれ垂れ下がっていたので、歩けば自分の皮膚を踏んで踏くために四つ這いで学校に避難してきたそうである。「いたいよ、いたいよ、あつ、あつ、あつ」と苦しむ下級生に与える薬など無く、一切治療出来ない状況だった。唯一、家庭科の実習で使う古い天ぷら油を傷口に塗って皮膜を作り、直接空気に触れなくなることで、わずかに痛みが和らぐそうだった。苦しむ下級生に天ぷら油を塗り続け看病したそうである。そのような中で痛みに苦しむ下級生が、ほんの一瞬安らかな顔になる。「あれっ?」と思い心臓に手を当ててみるとすでに息を引き取っていたそうである。

そうして次から次へと死んでいく下級生たちを火葬するために、先生の指示のもと校庭に穴を掘って遺体を入れていく。周辺に散乱した木材をかき集めて、残った天ぷら油をかけて切明さん自身が下級生の遺体に火をつけたそうである。すると火葬の熱による刺激で遺体の手や足が跳ね上がるのである。驚いて「まだ生きているんじゃないですか!」と先生に言うのと、「生きているんじゃない、見るな!」と恫喝された。しかし、見るまいと思っても体が硬直し、目を閉じようとしても閉じることが出来ない。ガタガタと震えながら燃えていく下級生を見ていたそうである。火葬が終わると、喉仏と小指の骨だけを拾いながら初めて泣いた。涙が止まらなかつたそうである。

### ●死者の上に立つ街

火葬後、埋葬されるなら、まだましな方かもしれない。現在、平和記念公園のある場所は戦前までは広島で最も賑やか繁華街だった。戦後、原爆



切明千枝子さん

で壊滅した街を片付ける力が広島には無かったため、瓦礫と身元不明の夥しい遺体の上に土を盛り、木を植えて公園にしたのが平和記念公園である。切明さんは公園を歩く時、いつも「ごめんね踏んづけて、ごめんね」と謝りながら歩くそうである。しかし、それは平和記念公園だけではなく、広島は街全体がそうなのである。今は何事も無かったかのように街が綺麗になり、みんなあの時の惨禍を忘れていくけれど、決して忘れてはならないと切明さんは訴える。また戦争が再び起きないという保証などどこにも無いのだ。

### ●日常の隣り合わせにある戦争

切明さんは第一部の終わりに渡辺白泉の「戦争が廊下の奥に立ってゐた」(一九三九年、日中戦争当時)に詠まれた句(と)という句を引用された。戦争は日常生活と隣り合わせの所にある。気をつけなければ、また廊下の奥に居る戦争がこのこと、しゃしゃり出てくるか分からない。そのためには、みんなで力を合わせて必死に押し止めなければならぬ。最後に切明さんは、これから生まれてくる子供たちや時代を背負っていく若い人たちが、当時の広島のような酷い目に遭って死ぬことがないように、力を合わせ、心を合わせて平和を守っていくことが、私の心からの願いだ」と講演を結ばれた。

## 《第一部 佐藤優さん講演レポート》

### ●ヒロシマとの出会い

佐藤優さんは広島市立大学に進学後、現在は広島大学大学院で被爆体験の継承をテーマに研究をされている。

仙台に生まれた佐藤さんは子供の頃に曾祖母から聞いた仙台空襲の話や曾祖父が朝鮮で戦死したことなどから、何となく戦争に対する関心はあった。しかし原爆のことについてはあまり多くを知らなかったそうである。高校生の時、平岡敬氏(元広島市長)の『希望のヒロシマ』という本の存在を知り、そのタイトルが気になった。なぜ「ヒロシマ」とカタカナ表記しているのかと。そこから原爆についての関心が高まり、原爆のことを学ぶために広島市立大学に進学したそうである。

以来、動物を主役にした紙芝居『8月のウサギ』被服支廠物語』の制作や、遠方の人たちでも被爆体験を聞けるオンライン証言会の開催など様々な活動をしてきた。ちなみに、この証言会は切明さんの「若い人の意見も聞きたい」という発案から、一方的に証言を聞くのではなく、証言後に被爆者からの問いをもとに若い参加者たちとディスカッションする証言会である。

### ●切明千枝子さんの出会い

佐藤さんは広島に来た当初、平和記念資料館での資料整理などのボランティア活動をしていた。

その後、被爆者に出会う機会が増え、二〇二一年秋、切明千枝子さんに出会った。切明さんは「戦前の広島は軍都であり、加害の街だった」と語られた。広島に来て様々な人に出会ってきたが、広島に加害について語る人に初めて出会った。それ以来、切明さんとの交流が始まったそうである。

### ●歌集『ひろしまを想う』発行へ

切明さんとの交流が深まるにつれ、切明さんが原爆で亡くなった人々への思いや生き残った自



佐藤優さん

責の念を短歌に詠み続けていることを知った。その数は千五百首以上に上る。その短歌を見せて欲しいと頼んだが、この短歌は心の内にあって外に発することが出来ない思いを詠んだものだから、見せることは出来ないかと断られてしまった。それでも粘り強く三か月にわたって何度もお願いした末に、やっと短歌を見ることを許されたそうである。短歌に詳しくない佐藤さんにも、その歌は心に強く響くものだった。是非、これを歌集として出版し、多くの人たちにも知って欲しいという思いから歌集『ひろしまを想う』を発刊するに至ったそうである。

切明千枝子(著)  
佐藤優(編)  
A5判 200頁  
1000円(税込)  
送料別途



ご購入・お問い合わせは  
yuust2001@gmail.com  
(佐藤)まで

### ●死者を再び殺さないために

私たちはなぜ被爆体験を聞くのか。ただ、聞いたことを人に語って伝え、繋いでいくだけでよいのかと佐藤さんは自問する。被爆者から聞いた話以外にも語られていない事や被爆者にとってあまりにも過酷で語られなかった事など、空白部分があるのだ。ましてや、その時に死んでいった人々

ちの無念は知る由も無い。佐藤さんは被爆して死んでいった人たちの無念に心を寄せ、その空白や死者の沈黙を想像していききたいと言う。

忘れてはならない。無かった事にしてはならない。被爆者の記憶は、それを聞いた者の中で生き続ける。しかし、その記憶すら無くなってしまえば、もう一度死者を殺すことになるのではないか。佐藤さんは再び死者を殺さないために、これから様々な人たちの声に耳を傾け、どんなものを見て、どんな経験をして、この被爆八十年を迎えるのかを考え続けていきたいと述べられた。

〔編集後記〕

このたびの非核非戦法会で特に印象に残った話がある。

法会の最後の挨拶で広島別院責任役員の菅川知由氏(安芸北組光楽寺)が教員時代に子供たちと平和学習で被爆体験を聞いた思い出を語られた。すると切明さんが何かを思い出したのか、急に立ち上がり、これだけはお伝えしたいと言われた。身に着けていた青いアクセサリーを掲げながら「このアクセサリーはね、よく人に綺麗な石ね、トルコ石?と聞かれるのですが、石ではありません。紙粘土です。お話に行った児童館の子供さんが作ってくれた紙粘土です。子供たちの手垢と指紋が沁み込んだ、金銭的には宝物なんです。これを首にかけておくことで、これを作ってくれた子供やこれからの世の中を背負っていく子供たちを二度とあの原爆の惨禍に遭わせることがあってはならないという思いが湧き上がってくるのです。だから私は原爆の話をしに行く時は必ずこれを身に付けて行くんですよ」と言われた。

間もなく九十六才を迎える切明さん。背中も曲がり、小さくなったこの方は今も毎日精力的に被爆体験を語り続けている。その姿には鬼気迫るものがある。このエネルギーは一体どこから湧いて来るのだろうかと思っていたが、この話を聞いてその源泉の一部を見たように思う。

新たに山陽四国教区が発足しました

全国の教区改編に伴い、七月一日をもって旧山陽教区と旧四国教区は新たに山陽四国教区としてスタートを切りました。

七月十一日には教務所(姫路)にて山陽四国教務所と四国教務支所の開所式と看板の除幕式が行われました。



広島別院の看板も新装

山陽四国教区の発足に伴い、広島別院の看板東面は「真宗大谷派 山陽四国教区 同朋会館」と改まりました。

※広島別院は教区同朋会館との併設となっています。



広島別院輪番 退任のご挨拶

七月一日付で山陽四国教務所長を拝命いたしました加藤真樹でございます。

このたび、広島別院輪番のお役目を泉原寛康輪番にバトンタッチさせていただきました。別院関係者のご理解とご協力のおかげで教区の改編が現実となり、日頃から別院を崇敬護持くださっている御寺院より専任輪番が就任されることに至ったことであります。あらためまして、これまでのお力添えに厚く御礼を申し上げます。



被爆から八十年という節目にあって、「非核非戦」をテーマとする学びや取り組みは、山陽四国教区と広島別院の連携をもって推進していかねばなりません。今後も広島島の地を訪問し、様々にお声をお聞きし、語り合いたいと思っております。引き続き、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

広島別院専任輪番 就任のご挨拶

この度、七月一日付で広島別院輪番を拝命いたしました泉原寛康でございます。

これまででは、旧山陽教務所長が広島別院輪番を兼務しておりましたが「山陽四国教区」の発足に伴い、教区の広域化に対応し、よりきめ細かい教化と運営を図るべく、地元から専任輪番を選出することとなりました。私は別院責任役員を拝命していることから、この度、専任輪番に就任した次第であります。



縁あって二〇一〇年の広島別院建設委員会発足から別院の再建に関わらせていただき、二〇一四年十月の別院落慶法要を厳修して早くも十一年が経とうとしています。

当初の別院再建の願いに立ち返り、別院門徒・崇敬寺院の住職・寺族・門徒のお力添えをいただきながら、地域教化の中心道場としての役割を模索していききたいと思っております。何卒、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

親鸞聖人の生涯を辿る

混乱

親鸞の門弟に唯円という人がいました。唯円は日本だけでなく、世界的に大きな影響を与えたといわれる『歎異抄』を著しました。その第二条に、晩年の親鸞のもとへ関東から門弟たちが上京し、念仏とは何か、信心とは何かを問い尋ねたという場面があります。親鸞が帰洛してから数十年を経るうちに、関東の門弟たちの間では異義がはびこり、彼らの信心が揺らいでいたようです。

このような異義は法然上人の時代でも同様な事が起きていました。念仏を称えれば何をしても構わない、むしろ悪を行う方がよいのだという造悪無碍の異義です。

また念仏を称えるのは一度でよいのか、それとも何度も称えるべきなのか(一念多念)、念仏は仏を心に思い浮かべながら称えるべきか、そうではないのか(有念無念)など様々な異義が生まれていました。親鸞の門弟たちに宛てた手紙からは、度々これらの異義について丁寧な答え、異義を正そうとしていたことが伺えます。

さらに親鸞は長男である善鸞を関東に派遣し、正しい教えを再確認するため、関東の混乱を収めようとしたのです。

法座・講座等のお知らせ

8月23日(土) 仏教入門講座 (第3シーズン)



【講師】 真城義麿 先生(元大谷高校校長)

【日程】 毎回 13:30~16:00 【会費】 500円

日常生活の様々な疑問を仏教に学ぶ講座です。ぜひご参加ください。

9月24日(水) 秋彼岸会

【講師】 加藤真樹 (山陽四国教務所長)

【日程】 13:30~勤行と法話  
16:00 終了予定



彼岸とはさとりの世界。太陽が真西に沈むお彼岸は阿弥陀仏の西方浄土を想い、教えを聞く最適の時節とされています。お誘いあわせの上お参りください。

毎月5日 定例法話 (ご今日の集い)

【講師】 県内僧侶(月替わり) 【日程】 14:00~勤行と法話(15:00 終了予定)

広島別院開基 教如上人の御命日(毎月5日)に法話会があります。

道場樹(編集室より)

先日、非核非戦法会で切明千枝子さんのお話を聞かせていただいた。被爆体験を力強く語る切明さんは、お話以外の場では、とても物静かで穏やかな方だった。

講演後、別院の本堂で静かにお参りされる切明さんを見て、何となく懐かしさを憶えた。背中の曲がったその後姿を見ていると自坊の法座に参っていたご門徒たちを思い出す。思えばあの人も被爆者であった。親を亡くし、子を亡くし、友をなくしたあの人たちは、まるでこの法座で何かを聞き届けなければと真剣に聞法していたように思える。今はそのほとんどが亡くなり、被爆体験を聞くことも叶わなくなった。

年々、被爆の実相を語れる被爆者が亡くなっていく。被爆体験の証言者が0になる日も、そう遠くはない。講演の第二部で佐藤優さんは、死んでいった被爆者たちの思いに心を寄せていきたいと言った。同時にその困難さも語られた。

原爆が歴史の教科書に載った一景象にならぬよう、死者の沈黙から平和への思いをいかに聞き取るかという課題を今回の法会でいただいた。(H・N)

